

## 月夜のわたし

8

庭のスモモが熟れるたび

ヤマモモがぼろぼろこぼれるたび

うれしい思いで果実酒をつくった

月日をかけてできあがっても

しかし

あまり飲みもせず

台所の奥に並んでいる

もったいない

もったいないので時おりグラスに垂らしてみるが

いい本が出るたびに

書評でこれと思うものに出会うたびに

ぜひ読んでみようと思い求めるが

ははは

けつきよく読まずに読みきれずに書架に並ぶ

資源ごみに出すほかないが

それももったいなく

ちらちらページをめくってみたり

生きよう

生きてみようと幾度も思い立ち

気をつけて体を養い

9

怠る心をいさめてきたつもりだが  
さて

どうしたことか

生き切ることのできないわたしが

へへへへへ

いま部屋に転がっている

月の光が差し込んでいる

もうそろそろ こんなわたしは捨てたらいいのに

それもしのびない

月夜の晩に見つけたわたしは

そう簡単に

捨てられようか

## 年の瀬

車 というような大きくて重いものを

運転 する人がいる

運 とか 転 とか 考えてみると不思議である

車 だけでなく

自分 というようなつかまえどころのないものまで

運転 する人がいる 曲芸師のように

わたしも若いころの跳ね上がりで

言葉 というあやしいものを

運転 できたらと思うようになった

しかしこれはなかなか手ごわい相手だ

ああ言えば こう言うし

こう言えば ああ言うし

でも じらされはぐらかされると

わたしの皮膚はますます燃えて

風の吹く地の上をさまようのであった

そうしてさまよったあげく

いま年の瀬に立っている

年の瀬から風景を見ている 言葉 に抱かれて

ぴちぴちだったはずの 世界 が

不燃ごみ になって積み上げられている

言葉 は 風花 となって散っている

その横を自転車の女が行く

荷かごにかさばった買物袋を入れる

ゆらゆら揺れる 道路 や 雲 を

うまいぐあいに 運転 して

## 失題

どちらかというと

「しゃべる」ことよりも「語る・語らう」ことのほうが好きだ

この両者はどう違うか

例えば 愛を語らう、とは言うが

愛をしゃべる、とは言わない この違いだ  
いや

近ごろは「愛をしゃべる」になってしまったのかな

およそしゃべりたくなるのは

小さな理屈や甘えのかずかずである

携帯電話の普及とも相俟って

世間はしゃべり体一色になった観があるが

今の大衆消費社会を維持するためには

しゃべって泡立てることが必須の条件なのかもしれない  
しかし

そのしゃべり体がふとしたことで

しゃべり体を超えて

音楽にまでなってしまうたらどうだろう

——そんなことを考えながらこの詩を書いていたら

この詩自体がしゃべり体になっているのに気がついた

そこでペンを描き

ふと耳を澄ましてみる

と、家のどこからへんな音が聞こえてくる  
バキュームカーが来て  
トイレの汲み取りをしてきているのだった  
小窓を開けて  
すみません、と言うと  
水を入れてくれるかね、と外から言う  
便器の中にどどどどどと勢いよく水を落とす  
そして底をのぞき込む  
まぜ返されたあの臭いがなまあたたくく吹き上がってくる  
なおも暗い穴の底をのぞいていたら  
だんだんと汚物が引き しまいには  
汚水が吸い取られる時の やわらかな震えるような  
不思議な音が

穴いっぱいに満ちた  
いつか恋人と聴きに行ったコンサートの  
サクサスの音に似ていた